

分析資料

獣医師の需給状況の分析方針について

獣医師の供給見通しの推計方針

獣医師法により、獣医師は2年ごとに就業状況等を届け出ることが義務付けられているため、現在の活動分野別就業状況を同届出に基づき把握。

新たな獣医師の供給数は獣医系大学を卒業し、獣医師国家試験に合格した者の数と一致するため、獣医系大学の入学定員に影響される。

今後の獣医師数を予測するためには、年齢、性別及び退職や出産、育児等による獣医事から恒久的又は一時的に離職する者の数を推定する必要がある。

獣医師の供給見通しの推計手法

獣医系大学の定員の仮定(今後一定、増加)から毎年¹の獣医師国家試験合格者数を推定し、1年ごとのコホートモデルにより2040年までの供給見通しを推計

分野別(産業動物、小動物等)の獣医師の供給については、新たに参入する獣医師だけが選択できるものとして推計

獣医師の需要見通しの分析方針

今後の必要獣医師数を予測するためには、獣医師の各活動分野における需要を推計する必要。

産業動物分野

小動物分野

畜産、公衆衛生等の公務員分野

製薬会社等の民間企業分野

その他の新規分野

診療業務を主とする産業動物、小動物分野における必要獣医師数の推計には、今後の飼育動物の飼養頭数の見通しが必要。

公務員、民間企業における必要獣医師数は、政策的要請、景気動向に左右される。

獣医師の需要見通しの推計手法

- ・産業動物分野における必要獣医師数
- ・小動物分野における必要獣医師数



飼育動物の飼養頭数を勘案した需要予測モデルに基づき推計

- ・国、地方公務員としての必要獣医師数
- ・製薬会社等の企業における必要獣医師数



将来的な採用予定に関する聞き取り調査に基づき推計

産業動物分野における必要獣医師数の推計

産業動物分野における必要獣医師数は、
将来の家畜の飼養頭数に依存。

将来の家畜の飼養戸数、頭数については、
家畜改良増殖目標等の指標がある。

畜種ごと(肉牛、乳牛、豚、鶏)に必要な獣
医療サービスを仮定すれば、家畜の飼養頭数
の見通しから、マクロ的な獣医療サービスの
需要見通しの推計が可能。

産業動物獣医師一人当たりの獣医療サー
ビスの供給可能量(例:1日当たりの診療可能
頭数、診療日数等)を仮定すれば、獣医療
サービスの需要見通しから、必要獣医師数の
見通しの推計が可能。

産業動物分野における必要獣医師数の推計手法

家畜改良増殖目標等から将来的な畜種ごとの飼
養戸数及び頭数を仮定



家畜共済等のデータから畜種ごとの病傷発生率、
必要診療回数を算出し、必要な獣医療サービスの
量の見通し(診療回数)を推計



臨床獣医師等に対する調査から獣医師1人当た
りの年間診療日数、1日当たりの診療可能頭数を
算出し、必要な獣医療サービス量の見通しから必
要獣医師数を推計

小動物分野における必要獣医師数の推計

小動物分野における必要獣医師数の推定にも、産業動物獣医師数の需要モデルと同様のモデルが適用できる。

ペットの飼養戸数、頭数に関する公的統計がなく、飼養実態の調査が必要。

ペットに必要な獣医療サービスの量の仮定が必要であるが、ペットの病傷発生率、必要診療回数等の統計資料が存在せず、実態調査が必要。

小動物獣医師1人当たりの獣医療サービスの供給可能量(例:1日当たりの診療可能頭数、診療日数等)についても、統計資料がなく、獣医師に対する実態調査が必要。

小動物分野における必要獣医師数の推計手法

消費者に対する調査を実施し、ペットごと(大型犬、中小型犬、猫)の飼養実態を年齢、世帯構成ごとに把握



将来の人口数、世帯構成の見通しに関する統計から、ペットごとの将来的な飼育頭数を推計



飼育者、臨床獣医師等への調査を実施し、ペットごとの病傷発生率、必要診察回数を算出し、必要な獣医療サービスの量の見通し(診察回数)を推計



臨床獣医師等に対する調査から獣医師1人当たりの年間診療日数、1日当たりの診療可能頭数を算出し、必要な獣医療サービス量の見通しから必要獣医師数を推計

消費者、臨床獣医師への調査について

小動物分野における必要獣医師数の推定に必要なデータを収集するため、消費者、臨床獣医師に対する以下の調査を実施する。

(1) 消費者に対する調査

インターネットを通じたモニター調査を実施している民間会社に調査を委託し、年齢、世帯構成、所得等のプロフィールとともに、以下のような小動物の飼育実態について地域別に推計が可能な調査を実施。(サンプル数1万件程度)

- 小動物(大型犬、中小型犬、猫)の飼育の有無と頭数

- 飼育している小動物の年齢

- 過去の病傷発生の種類、回数

- 動物病院での受診回数、受診内容(1頭/年)

- 実際に支払った診療、治療費(1頭/年)

- 支払ってもよい診療、治療費(1頭/年)

- 現在、飼育していない場合は、過去の飼育状況及び将来の見込み

(2) 臨床獣医師に対する調査

臨床獣医師に対し、小動物の診療実態について調査を実施。(サンプル数100件程度)

- 獣医師、補助者数(年齢、性別、フルタイム、パートタイムの別)

- 1週当たりの診療時間

- 1週当たりの獣医師の労働時間(フルタイム、パートタイム)

- 1週当たりの実際の診療頭数

- 1週当たりの診療可能頭数(犬、猫)

獣医師の需給見通しの評価方針

年齢、性別ごとの就業率に基づき推計された活動獣医師の数、各分野における必要獣医師数から今後30～40年間の獣医師の需要、供給数を算出

獣医師の需給モデルについて様々なシナリオを想定して需給見通しを評価

地域(都道府県又はブロック)、分野ごとの需給見通しについても評価

需給評価の際に想定されるシナリオ例

- 供給サイド
 - ・ 獣医系大学の入学定員を増減させた場合
 - ・ リタイア年齢等年齢、性別ごとの就業率を変化させた場合
- 需要サイド
 - ・ 家畜、小動物の飼養頭数の見込みを変化させた場合
 - ・ 獣医師一人当たりの診療可能頭数を変化させた場合

都道府県(又は地域ブロック)別、分野別にも獣医師の需給の見通しを作成し、地域における獣医師の偏在状況についても評価。

(参考)

医師の需給状況の検討状況

平成17年2月～18年7月まで「医師の需給に関する検討会」を開催

医師の需給モデルに基づく需給見通しの推計の結果、2022年には医師の需給が均衡し、必要な医師数が充足されると推計

一方、政策課題として地域に必要な医師の確保の調整、人口に比して医学部定員が少ないために未だ医師が不足している県の大学医学部定員の暫定的な調整を提言。

検討会報告書(概要)

- ・ 地域別・診療科別の医師の偏在は必ずしも是正の方向にあるとは言えない。また、病院における勤務医の負担は増加。
- ・ 2022年には医師の需要と供給が均衡し、マクロ的には必要な医師数は供給される。
- ・ 今後は、地域に必要な医師の確保の調整、医学部定員の暫定的な調整(医師が不足している県の大学医学部)、持続的な勤務が可能となる環境の構築と生産性の向上等の対応が必要。

(参考)

医師の需給状況の検討状況

「医療需給」は診療に必要とする医師を入院(退院患者数)と外来(外来患者数)の推計を基に算出し、さらにそれぞれの患者の重症度を勘案し、医師の労働時間を一定の値に設定して試算。

「医療供給」は現在の男女別卒後就業率を前提として男女別医学部入学者に対応した将来医師数をコホート推計法を用いて算出。



医師の需給算定式

供給 = 医師数 × 生産性、 医師数 = 各年登録数 × 卒後就業率

需要 = 患者数 × 重症度、 患者数 = 年齢階級受診率 × 将来人口